



---

## OR 学会長就任の御あいさつ

---

加 藤 威 夫

A) 安川さんに代り、会長に就任するにあたって。――かつて安川さんにどうして、OR学会長を御引きうけになったのですかと伺ったときに「岸道三君が出来ることなら、私だってやれますよ」と云われたことを憶えていた。学会長に安川さんから懇請されたときに、私も一寸そう思っていたかったが、よくこれをT型式の考え方で分析してみると、なるほど縦の部分の専門的なことは、そう深くはなくても、横の部分の広い視野についてみると、皆さんすでに御承知のように岸さんや安川さんは、誠に巾の広いものをもっていらられることは、皆さんの御承知の通りである。専門的のことは、すでに数多くの練達の方がいられるので、それを組織化し巾広く活躍出来るようにするのが、会長の仕事のように感じた。そう考えてみると、自分には出来るのかと疑問をもった。然しすでに安川さんの御人柄は御承知のように、なかなか人のひきうけない、原研の理事長とか、オリンピックの組織委員長の如き仕事を御引きうけになった技術界出身の最高峯にいられる方である。而も安川さんは東大電気科の先輩である。その方が「お前やれ」と云われたときは非常に栄誉と感じ、どうしても御断りすることが出来なかったのが私のいつわらざる心情であった。ただ考えられることは、この会長の座と云ふものは技術者として最高の名誉であるとともに責任の甚だ大きなものとしみじみ考えたのである。しかしこの学会は年間の予算はそう多いとはいえないが、真面目に経営され、英文雑誌や定期的の刊行物を出していられて、もうすでに立派な組織が出来ていて、本気でこの学会を育てようと努力してられる有力な方々が多いので、私の如きものが会長になっても、どうにか皆さんとともに歩いてゆけるだろうと感じている。ただ私は20年近くトップマネジメントの仕事をして来たので、その経験を生かして、どうにかしてこのORが企業の有力な道具として、各企業に役立つものになりたいというのが念願である。このことは安川さんからうけついで方針でもあるので、これに私としては相当の重点をおきたいと思っている。このORは経営の道具としては誠に高度のものであるので、その使い方にも又色々な工夫が生じてくることであろう。従ってこの学会は、学者諸先生の研究相互啓発の場であり、その研究が企業に應用されたケースの発表の場でもあるであろう。

B) 私がこのORを経営の手法として、非常に大切なものと認識したのは、1951年にガリオア

の産業教育のチームでクリーブランドのケース・インスチテュート・オブ・テクノロジーを訪問し、アルノフ博士から説明をきいたときからであった。それ以来必要とは思いつながら、思いのまませず余り進歩をしないのではあるが、若い人人の研究の促進には理解が出来るようになった。私がこのORを使ってよかったと思っていることは三菱電機と、日本建鉄で働いていたときの経験である。それは

1. 役員賞与は何程が適正であるか。
2. 扇風機の次年度の販売予測はどうしてきめるか。
3. オーダーメイドと標準品との生産の割合は何程が最適か。
4. 在庫管理
5. 設備拡充のときに何程投資すべきか。

等であって、誠に有効にORをつかった。

C) 今後この学会はどうあるべきか。

- 1) 今後常任理事会で、今学会が発足したとして、最も理想的の学会の在り方を研究してもらいたい。而して理事会の承認をえる。
- 2) 学会であるので、あるグループは理論を深く研究して、知識交換をするのはどうすればいいか。
- 3) 企業にORを経営の手法として最も効果的に使ふにはどうすればよいか。ORをトップの経営の手法として、使ってもらへるようになるにはどうしたらいいか。
- 4) 国家として経済発展のために、いかにOR手法を使うようになるか。

等幾多の問題があると思うので、理事会において、自由に討議して頂きたい。

D) 最後にいいたいことは結果として、色々の意味において、私達はいい仕事をして、この学会の繁栄を願ってやまない。